『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡』発刊の経緯について

川田洋一

東洋哲学研究所は、創価学会より『法華経』原典写本シリーズの出版を委託され、その編纂を推進してきたが、その第一弾として、中国・旅順博物館と創価学会の共同出版『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡』がこの五月に刊行された。

その意義と発刊までの経緯について、簡潔に述べてみたい。

東アジアにおいて、『法華経』は膨大な仏教経典の最高峰であるとされてきた。創価学会は「仏法を基調とした平和・文化・教育」の各部門に運動を展開しているが、その主軸は『法華経』である。また創価学会の『法華経』解釈は、中国の天台学をふまえつつも、日本の日蓮による深化・実践化を基盤としている。更に戦前戦中の創価学会の初代会長・牧口常三郎、二代会長・戸田城聖の実践と入獄、そして戸田会長の〝獄中体験〟を経て、現代社会へと開いていったものである。また池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長は、戸田二代会長の「人類の幸福と世界平和」という理想を実現するために、その活動の場を世界へと広げ、人類の心に平和の砦を築くための行動に献身されている。その行動の基盤は、仏教思想、なかんずく『法華経』の思想である。

さて、旅順博物館所蔵の『法華経』の四十五枚中三十八枚の断簡が、古文書学・文献学的な研究から、ほぼ、五～六世紀のものと推定され、これまでに公表された写本のうちで最も古い部類に属し、また鳩摩羅什訳『法華経』の原典と内容的にも時代的にも接近しているものと考えられている。

中国・日本を含む東アジアにおける『法華経』の展開は、主として鳩摩羅什訳『法華経』を基礎とするものであった。創価学会による法華思想の展開と実践も原典的には鳩摩羅什訳『法華経』によっている。故に、鳩摩羅什が原典とした『法華経』とほぼ同時代のサンスクリット『法華経』を世に出すことは、創価学会にとっても深い意義を有する事業なのである。

また、学術的に見れば、「旅順本法華経」の全容が解明されることにより、法華経サンスクリット原典に関する諸問題、法華経漢訳の諸問題、仏教サンスクリットの言語学的諸問題等について、更なる研究が進展していくことが期待される。

創価学会にサンスクリットなど『法華経』原典の写本刊行に向けての出版委員会が発足したのは、一九九四年の一月であった。この計画は、『法華経』写本等の写真版とローマ字版の出版を目的とするもので、仏教研究のための基礎資料を広く提供し、学術の振興に寄与したいとの構想からであった。そして、その研究と編集作業が東洋哲学研究所に委託されたのである。

当初は、サンスクリット写本の中でも、欠損の少ないネパール系写本を中心にその出版を進め、同時に、チベット語訳、西夏語訳など各言語の写本や版本の出版も行う予定であった。

この背景には、それまで各国の研究者・機関等から貴重な写本の複製版やマイクロフィルムが東洋哲学研究所の創立者である池田SGI会長に贈られてきたということがあり、また、インド文化国際アカデミー、カルカッタ・アジア協会、中国社会科学院、ネパール国立公文書館、ロシア科学アカデミー東洋学研究所（サンクトペテルブルク）など各国の学術・研究機関との交流が進展していたということもあった。

次に、各国から池田ＳＧＩ会長に贈られた『法華経』写本等を列挙してみる。一九七七年四月、ソ連科学アカデミー（当時）副総裁・アカデミー会員のＰ・Ｎ・フェドセーエフ氏より、モスクワ大学のＲ・Ｖ・ホフロフ総長を介して池田ＳＧＩ会長に「ペトロフスキー本」（カシュガル本）法華経写本の写真版が寄贈された。その後、ソ連科学アカデミーはロシア科学アカデミーとなったが、その同じ東洋学研究所からは、九五年三月に「西夏語訳法華経」を収めたマイクロフィルムが贈られた。

一九八四年六月には、池田ＳＧＩ会長の第六次訪中の際、王震・中日友好協会名誉会長から北京民族文化宮所蔵のネパール・チベット系のサンスクリット「法華経写本」（複製）が贈呈された。

また、一九九一年十月には、インド文化国際アカデミーのロケッシュ・チャンドラ博士が来日した折、「ペトロフスキー本」のマイクロフィルムが手渡された。同博士からは、九二年九月に「ペトロフスキー本」の写真版、更に九四年一月に「ギルギット写本」のマイクロフィルムも届けられた。

一九九二年十一月には、ネパール・トリブバン大学元副総長のＳ・Ｂ・シャキャ氏が来日した折、同国国立公文書館所蔵の「法華経写本」（複写）が手渡された。

一九九六年七月には、カルカッタのアジア協会・ロイチョードリ事務総長からネパール系「法華経写本」のマイクロフィルムが届けられるなど、実に二十年にわたる池田ＳＧＩ会長の各国との交流という積み重ねがあって、創価学会の写本出版事業となったのである。

さて、次に、『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡』の出版に至る経緯を簡単に紹介したい。

旅順博物館は中国最古の博物館の一つであり、その設立は日本の管理下にあった一九一七年にさかのぼる。当初は『関東都督府物産館』『関東庁博物館』などと称された。第二次世界大戦の終結後は、一時旧ソ連の管理となったこともあったが、一九五一年には、完全に中国側の管理するところとなった。

現在、旅順博物館の所蔵品は数万点にも上り、西域出土の文物、新石器時代から明・清代に至る大連市周辺の出土品、北魏時代の石仏をはじめ、中国各地・各年代の

青銅器、陶磁器、絵画、工芸品などが所蔵されている。

特に、ホータンをはじめシルクロード出土の文物は、広く内外に知られ、そのコレクションは、世界の研究者の注視するところとなっている。「梵文法華経写本断簡」は、現在の中国新疆ウイグル自治区の各地から収集されたものであり、所蔵品の中でも特に重要な位置を占めている。

創価学会が前述の『法華経』原典の写本等の研究を推進する中で、一九九四年一月、北京を訪問中であった山田勝久大阪教育大学教授（東洋哲学研究所委嘱研究員）が、中国社会科学院の蔣忠新教授級研究員に会う機会を得た。談たまたま、蔣氏の研究の話になり、同氏が一九八一年の夏以来、旅順博物館所蔵の西域出土「梵文法華経写本」の研究を続けており、その成果を出版し、世界に発表したいとの意向が表明された。帰国後、山田教授から蔣氏の意向を聞いた創価学会出版委員会では、東洋哲学研究所が中国社会科学院（世界宗教研究所）と一九九二年に交流協定を締結していたこともあり、当研究所にその編集を委嘱したのである。

このようにして、このシリーズの第一巻は「旅順本法華経」の出版ということに決定したのである。

一九九四年六月、東洋哲学研究所の一行が北京を訪問し、蔣氏と会見した。蔣氏によれば、八一年の夏、旅順博物館を訪問した折、断簡の一片を確認したという。八七年の冬に同博物館を再訪、四百余りの断簡の撮影を依頼した。それが八九年の夏に届けられ、蔣氏はその中から法華経断簡として四十五片を確定したということが判明した。

そしてその直後から、蔣氏の紹介で旅順博物館との交渉が開始され、一九九五年六月には、共同出版のための協議書の原案が固まった。以後、劉廣堂館長の並々ならぬ尽力により、出版に向けての準備作業が行われた。同館長は何度も北京に足を運び、国家文物局の許可を取り付けられた。九六年五月に協議書が成立・調印され、同年六月には、同博物館で「法華経写本」の撮影が行われた。

発刊までには、季羨林北京大学教授、蔣研究員、劉館長をはじめ、国家文物局、遼寧省、大連市等の関係者の

方々、そして池田ＳＧＩ会長、秋谷会長など創価学会の関係の方々に多大な支援をいただいたことに心から感謝する次第である。

今後の写本関係の出版計画としては、ネパール国立公文書館所蔵のサンスクリット法華経写本、中国（チベット自治区等）にある未発表の写本、ロシア科学アカデミー東洋学研究所（サンクトペテルブルク）所蔵の写本、並びに西夏語訳法華経（木版）などを考えている。

（かわだ　よういち・東洋哲学研究所所長）